郷土ちがさき

第 147 号
発 行　令和2年1月1日
発行者　茅ヶ崎郷土会
会 長　平野文明
編集責任　平野文明

茅ヶ崎市柳島の湯屋四例　杉山　全……2
石仏紹介　海老名市　現国分寺の寶篋塔　平野文明……7
本の紹介『円蔵誌』　小川正恭……12
風（自由投稿欄）長谷川由美・小川正恭・羽切信夫……13
史跡・文化財めぐり報告二件　山本俊雄……18
第47回郷土芸能大会　編集子……23

私が小学校に上がるまで住んでいたところは、熊本県上益城郡御船町大字七滝字木の末という、山襞の中に埋没しているような所でした。今では記憶が曖昧ですが、草葺きだったような、農家造りの大きな家に、曾祖母、祖父夫婦、両親と住んでいました。

その頃はもちろん水道など来てなくて、向こうの山の湧き水を、半分に割った孟宗竹をつなぎつなぎして屋敷の入口まで引いてありました。朝、顔を洗うには、庭を突っ切ってそこまで行きました。五右衛門風呂も同じ所にあったので、雨の日は傘をさして行きました。

私が何歳だったか、元日の朝、祖父と一緒に顔を洗っているとき、祖父が言ったことを覚えています。

「今日ンこン水ァ、若水テいうとバイ。コッデ顔バ洗うと若返るとゾ。」そして祖父は、東の方を向いて柏手を打ちました。

今になって思うのですが、水は貴重品だったのだと。

アフガニスタンの荒れ地に、中村哲さんたちの努力で水が引かれて、緑が戻っていると聞いていました。

その中村さんを不幸が襲ったことは、実に残念です。お正月ですが、中村さんの冥福を祈ります。

F・HIRANO

茅ヶ崎市柳島の湯屋四例

杉山　全

一、にんじゅう湯

「にんじゅう湯」は柳島流の言葉のなまりで、本来は「人参湯」。江戸時代末期から大正時代にかけて柳島の海岸地区（昔は「河岸：かし」と言った）にあった。今でも「にんじゅう湯」という屋号の家がある。当主は私の同級生の内藤さん（八十歳）。

当主の話によると、湯屋の所在地は、海岸地区の中心部、現在の青木酒店の住まい兼倉庫の所であったようである。

母親の話では、漁師もしていたので、海が急に時化ると相模湾（西は東伊豆、東は西浦三方面）で漁をしていた漁師が柳島に避難し、家の囲炉裏を囲みながら談笑して、時化の収まるのを待っていたということだったと内藤さんは話してくださった。

また、十年位前に、柳島海岸から平塚市須賀に嫁がれた大正生まれの方から、「あなたはにんじゅ湯の息子さんだね…。私はあんたのところのニンジンの入ったお風呂に入ったことがあるよ」と話しかけられたそうである。

内藤さんの弟さんからも情報が寄せられた。『広報ちがさき』二〇一八（平成三十）年十二月十五日号の五頁に掲載されている「茅ヶ崎ゆかりの人物たち　―第五回　平塚らいてう」に次のように書かれていたと。

１９１４年（杉山記　大正三年）、奥村はらいてうとの共同生活に入り、青鞜の口絵や挿絵を描いていましたが、翌年、結核と診断されて南湖院に入院。らいてうは長女曙生を背負って奥村を見舞う日々が続きました。その後自宅療養を許可され、南湖院近くの「人参湯」という湯屋のはなれで一家の生活が始まり、らいてうはここで執筆を続け療養生活を支えました。

また次のような記録も見つかった。平成二年三月発行の『柳島うつりかわり』（柳島自治会・五三会編集発行）に収録されている「石上巡査日記」九六頁に、

明治四十五年二月十一日　午後二時柳島杉崎丹蔵の処に至り戻り、人参湯に至り入浴す。

とある。この記事を茅ヶ崎市史史料集第一集『明治の巡査日記―石上憲定「自渉録」』（平成九年茅ヶ崎市発行）でもう一度確認すると、同書には明治四十四年三月三日の日記までしか収録されていないが、七〇四頁の明治四十四年二月十一日の条に次のようにあった。

前十一時早川武藤両巡査来ル暫ク咄シテ行キタリ、午后荊妻・イセ・柳島杉崎丹蔵ノ処ニ至リ、戻リ人参湯ヘ至リ入浴ス、午后二時武藤巡査ト共ニ柳島人参湯ニ至リ入浴ス、酒二本・酢蛸一皿・吸物・酒一本・岡田（筆者記　「寒川村の大字」と編集者の注記がある）ノ醸造家宮川ノ老人馳走ニ呉タリ、武藤妻子子供ヲ連レ来リ居リ荊妻ニ引合セタリ、夜ニ入リ宮川老人ノ座敷ニ至リ馳走ニナル、酒三本・吸物・予ハ吸物ノミ馳走ニナリ

タリ（以下略）

『うつりかわり』と『自渉録』の記載に一年の誤差があるが、原本には当たっていない。石上巡査の日記にはもっと書かれているかも知れないが、らいてうと石上憲定に関する記録から、明治末期から大正初期には確かにこの湯屋が存在したことがわかる。また、石上、武藤両巡査が湯屋で酒食のもてなしを受けていることから、そのような営業も行われていたこともわかる。

蛇足だが、「人参湯」の人参は薬用ニンジンとの関わりがあるのではないかと思っている。実際に見聞きしたことのある方がいらっしゃれば、お話を伺ってみたいところである。

柳島には、江戸時代の末期から大正時代にかけて人参湯、藤間温泉、大南の湯屋（山口屋）、藪下温泉の四ヶ所の湯屋があった。私が、小学校三年生（昭和二十三〈一九四八〉年）ころと記憶するが、学校帰りに見知らぬ人に、「この辺に温泉があると聞いてきたがどこにありますか？」と尋ねられたことがある。そのくらい近郷に柳島の温泉は知られていた。

次に紹介する三件の湯屋は、前記した『柳島のうつりかわり』に、青木千代さんが「藤間温泉のこと」「大南の湯屋のこと」「藪下温泉のこと」（四七～五〇頁）として書き残したものである。どれも貴重な記録である。同書は平成二年に再刊されているが、今では所有している人が少なくなっていると思われるから、抜粋してここに紹介しておく。なお、事実と違っているところは訂正しておいた。

（令和元年十一月二十日　記）

二、藤間温泉のこと

青木千代

藤間よいとこ　西の下で待てば　主が漕いでる　あの宿の船

柳島の西方に藤間温泉という宿屋があった。文久元年（一八六一）藤間善五郎（杉山注　柳庵）さんが、松の芯を刳り抜いて、細く割った竹をその中に入れて掘り下げて行く工法で、一年七ヶ月かけて掘り抜き井戸を掘った。この掘り抜き井戸はすごく水の出が良く、人の身長をはるかに超える高さまで噴き上がった。あまりに水が湧き出るのでもったいなく思った藤間家からの、前の家の藤間勘次郎（福寿）さんに「この水を利用して見ては」との勧めで、藤間家（杉山注　現民俗資料館　旧藤間家住宅）の屋敷の東の方の庭で村の人を相手の湯屋を始めた。当時は各家に風呂のある家は少なく、村人にとっても重宝がられた。

その後この湯は、皮膚病や火傷に良く効く、また噴き上がる滝のような水に打たれると万病に良いと評判になり、近在からも人々が来るようになった。明治末期あたりに手狭になったので大きく建て替え、座敷などを造り、日帰り客の休み場所とした。そして泊り客は、勘次郎さんが旅館式に二棟建て、舟遊びの客をあつかう様になった。

団体さんは、ノボリを立てリヤカー（木のタイヤであった）で茅ヶ崎駅まで迎えに行った。松尾道はゴロゴロした道で、荷物も人間も飛び出してしまう様であった。夜は宿の提灯が赤々と燃え、大正十年頃が一番の盛況であった。客の中には有名人も多く，都会の人との交流もでき、そうしたことから職を世話され都会へ働きに出て行く人もあった。

大正十二（一九二三）年の大震災でこの水も噴き上がらなくなり、ガチャンコガチャンコとポンプで汲み使用するようになった。

八幡宮
卍善福寺
旧藤間家住宅
藤間家の掘り抜き井戸
藤間温泉
藪下温泉があった所
「大南」の湯屋
「人参湯」があった所
屋号「人参湯」の内藤家
柳島一丁目
柳島二丁目
ユーコープ柳島店
浜見平
浜見平団地
柳島第三公園
柳島第二公園
柳島ポンプ場
松尾川
柳島海岸

藤間温泉で使っていた手ぬぐい
（画像提供　杉山 全）

大震災の起こる五、六日前から水の中に貝殻がまじりはじめ、布で漉して使用した。何故だろうと皆が不思議に思っていた矢先の大震災で、これが前報せであったのかも知れないと当時の人は言っていた。

その頃の事とて水質を分析する筈もなかったが、吹き出る水はブクンブクンとあぶくをだしていて、ここからはガスが出るといわれこれにマッチをつけるとパッと燃えた。水そのものは赤茶色をしていたが、白い物を洗うと真っ白にきれいになった。

大やけどで苦しんでいる人が、遠く横須賀あたりから荷車でこの水を買いにくることもあった。また藤間家の近くを流れている川遊びお客さんは絶え間なく、特に夏は忙しく、舟の屋根によしずを張り、中で、捕れた魚で天ぷらなどをこしらえて食べさせた。

昭和五年、勘次郎さんの息子（栄蔵）さんの代に自分の屋敷の方に湯屋を移転し、昭和十四（一九三九）年頃、こちらの方にも掘り抜き井戸を掘ったところ同質の水が出た。その後しばらく続いていたが、戦争になり都会から疎開された方々の部屋になったり、燃料事情や人手不足により、長いこと続いた藤間温泉もやむなく閉じる事になり、柳島名物も一つ消え惜しいことをした。

藤間温泉の唄（扇子に書いてお客に出した）

・行けや行け行け茅ヶ崎降りて
　道は十八丁あの藤間まで（駅からの道程）
・おせやおせおせ茅ヶ崎降りて
　押せば藤間が近くなる（車で押して来る情景）
・藤間よいとこ　川原が見える
　沖じゃかもめが二ツ三ツョー
・沖の四丁櫓がありゃ何処の舟
　主が見えます宿の舟

三、大南の湯屋のこと　　青木千代

江戸末期より明治中頃まで相州柳島村の山口甚五左衛門という人が「熱海　河原湯　湯治所山口屋」という湯屋を営んでいた。この屋敷には掘り抜き井戸（工法は藤間家と同じ）があり、いつもこんこんと水が涌き出ていた。それに湯河原の湯を混ぜて使用し、薬湯といわれていた。この掘り抜き井戸は、大正十二年の大震災で止まってしまった。

江戸時代には柳島湊へ各所から年貢米が運ばれて来た。その取り立てをこの宿で行い、また、その役人の宿泊所にもなっていた。

集積された年貢米は、柳島湊から四百石船で江戸や伊豆方面へ運ばれた。伊豆方面へ行ったとき、その帰路湯河原へ寄り、温泉を樽で買い求めて来た。いつ頃かはっきりしないが一樽五銭くらいだったということである。

明治に入ってからも、東京方面からの客で賑わっていたそうだ。

茅ヶ崎市史二巻によると明治十九年から二十二年当時の地方税がこの山口屋が十五銭となっている。

客の中には宿泊代の代わりに刀、陣羽織、袴、などを置いていく人もあったそうだったが、次の代の人が湯屋を廃業した際、茶屋町の江戸屋という旅館にほとんど売ってしまったそうだ。

現在、屋敷の一角の稲荷さんの前に、藤間柳庵書の「あたみ　かわらゆ　湯治所　山口屋　水ゆかわらより」の石碑が立ち、当時の面影を偲ばせている。

また、当時のものと思われる水鉄砲式の消火器が遺されているが、今見ると幼稚でお粗末な物だが、これも旅館業ということで、申請してから一年掛りでやっと備えることが出来たという話である。消火ポンプの表面に「御免」という焼印があるが、これは今でいう専売特許の意味だそうだ。現在は山口さんの寄付により柳島記念館資料室に展示してある。

四、藪下温泉

青木千代

藤間温泉とともに柳島名物の一つに藪下温泉があった。明治の中頃に掘り抜き井戸を掘ったところ、沢山の水があふれ出たのを利用した鉱泉で、村人を相手の銭湯を始められた。

家庭風呂が殆ど無かった当時は、「おしまいでございます」（「今晩は」の方言）のあいさつがあちこちで交わされる夕方から、夜遅くまで下駄と手拭いを持って行き交う人で祭りのように賑やかであった。下駄を持ってというと一寸不思議のようだが、当時野良仕事はすべて裸足であり、そのまま着替えと履物を持って風呂屋へ直行というわけ…　都会では見られぬ風景であった。

大正時代になっての頃、素人天狗連の義太夫（阿波の鳴門、弁慶上使、お里沢一など）や薩摩琵琶の会、八木節、安来節の演芸など、客間を開放しての宴会に、村人の老若男女が押し寄せ、宵の楽しい集いが村中をとても明るくした。また、旅芸人が泊まると皆でお金を出し合って色々な芸をさせて見物した。

藤間温泉は主に若い衆で、藪下温泉は年配連が集まり、村人にとって唯一の社交場であり、なかにはそこで結ばれていく人もあった。

街場からは、きれいな服装をしたお客も見えて、時には芸者も上がり、三味線や太鼓の音も響いたし、カフェーのお姐さん方が贔屓のお連れと遊びに来たりした。また、東京の吉原の旦那方も静かな柳島の海や川を愛し、毎年のように避暑にみえた。

常連客の中で異色の客は、ロシアの人で横須賀から奥さんや子供をつれて一週間位泊まりがけで遊びに来た。この外人さん、自家用車で乗り付け、車などほとんど見られなかった当時は、子供が珍らし気に集まり、触るとバクハツするぞとおどされ、こわごわ遠まきにして見ていたとか、そんな笑い話もある。

大正十二年の大震災で、藪下温泉でも大きな被害にあったが、復興も早く、その後も色々な客層が多かった。

電話も無い不便な時代で、お客が急に帰る時など、南口駅前のタクシーを、夜遅く怖い道をふるえながら迎えに行ったこと。暮近くになるとネギまるきを終えて来る人で、銭湯はネギの匂いでいっぱいになってしまったことなど、当時居られた人が、いろいろ思い出を語ってなつかしんでおられた。

先代のおかみさんは徳川夢声さんの親戚の人だったとか、旅館のおかみさんらしい人当りの良い、しっかり者だった。

茅ヶ崎の片隅の柳島ではあったが、こうしたことにより、早く

から都会との交流があり、楽しいことも多かったようだ。
　戦争が拡大されて物資の欠乏時代になり、手不足も重なり廃業された。

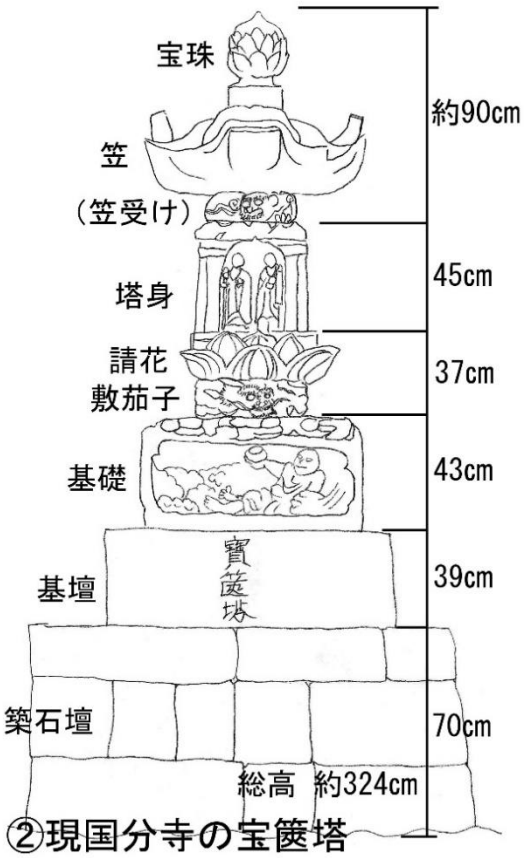
石仏紹介

海老名市国分　現、国分寺の「寶篋塔」

平野文明

　令和元年十一月十六日に行った海老名市国分と河原口の史跡・文化財めぐりで、国分にある東光山医王院国分寺（現、国分寺）境内に建つ「寶篋塔」を見学した。三メートルを越す大型の石塔で、文政七年（一八二四）の年銘を持ち、細かい彫刻が施され、正面に「寶篋塔」と刻字されている。
　石塔の宝篋印塔は、我が国では鎌倉時代に出現するが、江戸時代にもたくさん建てられている。茅ヶ崎市内の江戸期の事例は、堤の浄見寺にあるような領主の供養塔として建てられたものを除くと、代官町千手院（元文二年：一七三七）、赤羽根宝積寺（元文五年：一七四〇）、萩園満福寺（寛保元年：一七四一）、菱沼長福寺（寛延三年：一七五〇）がある。石仏の一般的な傾向として、江戸時代になると、出現期の形と大きく違っているのだが、現国分寺の「寶篋塔」は、江戸期の宝篋印塔の中でも一段と変わっている。どのような違いがあるかを茅ヶ崎市萩園の満福寺の事例と比較しながら見てみよう。

現国分寺の塔の、基壇の正面にある「寶篋塔」の銘は、宝篋印



②現国分寺の宝篋塔

①茅ヶ崎市萩園満福寺の宝篋印塔

塔から「印」の一文字を省略したものであるから、それとして建立されたものであることは明らかである。

なお、この塔については、『広報えびな』七三四号（二〇〇一年十月一日号）に「海老名むかしばなし」四七〇話「現国分寺の宝篋塔とご詠歌」として紹介されている。

二つの宝篋印塔を比較するにあたって、萩園満福寺の塔を①とし、現国分寺の塔を②と表記することにする。

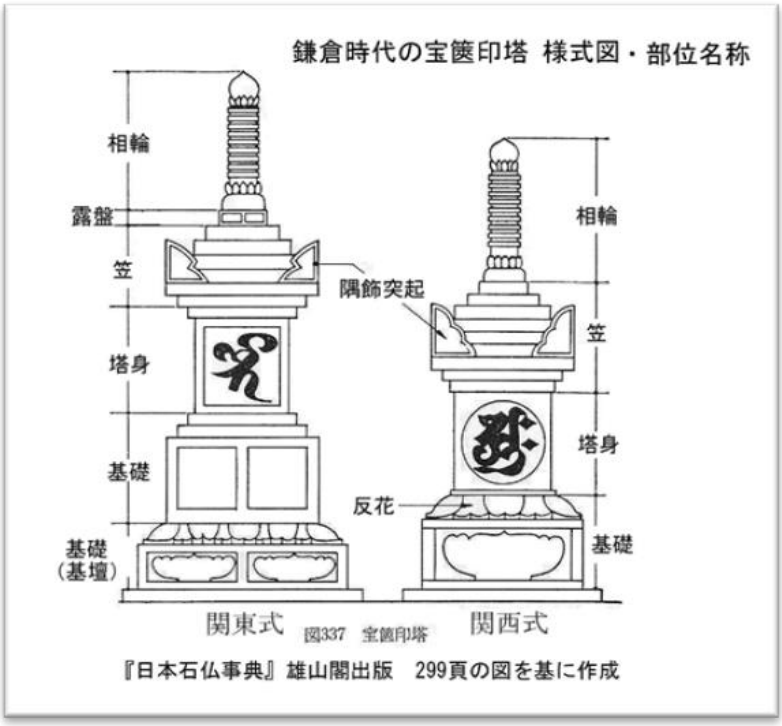
一、基礎

①は基礎に寛保元年（一七四一）の年銘と宝篋院陀羅尼経（一切如来心秘密全身舎利宝篋院陀羅尼経）の一部を刻してある。これに対し、②の基礎には、その正面・向かって右面・左面の三方に絵を彫刻している。

その彫刻を順に紹介すると、まず正面の絵柄は、岩場の海岸で男性が身を横たえ、右手を挙げて煙の立つ香炉を捧げる図である。右側面の絵は竹林の虎で、背中に三本の巻物を背負っている。両絵とも意味ありげで、基づく出典がありそうだが分からない。左側面は唐獅子牡丹である。裏面には彫刻はなくて次のような銘がある。（「／」は改行を表す。）

市谷田町講中／同所壹丁目／同下貳丁目／同八幡町／（右から横書きで上段に）六番組／（中段に）なむうゐの□（最後の文字が読めない）／（下段に縦書きで）鳶中／壹丁目／上二丁目／五丁目／四丁目／左内坂町／（上二丁目と五丁目の間の下に）若者中

「市谷田町」は現在の新宿区内に位置し、ここに記されている壹丁目から左内坂町を含んでいた。「六番組」は市谷田町とその近辺の町内で組織されていた江戸町火消しの名である。六番組の内



部は「な・お・む・う・ゐ・の」の六組に分かれていた（東京消防庁のホームページによる）。「鳶中」とあるのは町火消しが鳶職の連中から成っていたからである。また「若者中」とあるが、これが「鳶中」の中に組織されていたのか、鳶とは別組織だったのかはここでは分からない。

①の基礎の上面縁には反花（かえりばな）が施されている。②の同じ部分（人物像の上）は渦巻き状の突起が彫刻してある。この突起は①にある反花が変化したものと見ることができる。①の基礎の反花は、鎌倉時代の様式図の関西形式の基礎に見られるものである。

二、②の敷茄子(しきなす)と請花(うけばな)

②の基礎の上の敷茄子と請花は一石からできている。敷茄子の彫刻は、正面に頭を配置し、目をこちらに向けた龍で、左回りに体をめぐらしているように見える。請花は蓮華座になっていて、その上の六地蔵を彫刻した塔身を受けている。多くの場合、宝篋印塔の基礎の上には直接、塔身が置かれているので、②の例は特異である。

三、塔身

塔身は塔の最も重要な部分で、真言宗の場合は大日如来を囲む四仏が種子で表されることが多い。①の如くである。しかし②は、背面を除く三面に二体ずつの地蔵立像を配した六地蔵が彫刻されている。筆者は宝篋印塔のこのような例を他に見たことがない。このデザインがど

基礎の左側面　竹林の虎（巻物を背負っている）

のような考えに依るものなのかを知りたいものである。

①と②の塔身の違いから、①は宝篋印塔である趣旨を残しているが、六地蔵を彫りつけた②の塔身からはその趣旨が窺えない。

①では基礎より上を請花で受けている。①の基礎より上部は、鎌倉時代の宝篋印塔の様式を保っているので、それを一体の物として請花の蓮華座に据えたという意図を感じる。江戸期になると多く見られる様式である。

これに比べ②の請花は基礎ではなく塔身を受けている。さらに請花の下に敷茄子を置いている。敷茄子は蓮華の茎をあらわすものであるから、敷茄子と蓮華が一体化しているのは理屈に合っている。しかし基礎と塔身の間にこれを置いたことから、基礎と塔身の連続性はなくなってしまった。

四、笠及びその上部

笠は宝篋印塔に限らずいろいろな石塔に見られるものである。多くは塔身などの上に直接置かれている。しかし②では塔身と笠の間に敷茄子に似た形の部位が置かれている。これも他に例を見ないので、今はこれを「笠受け」と仮に呼んでおく。彫刻は顔を正面に向け体を左回りに配した獅子である。

笠より上は、①は形が変化しているが宝篋印塔の基本形を踏襲しているのに対し、②では笠は屋根になり、その上の宝珠は花のつぼみになっている。

以上四ヶ所を比較してみたが、これらから言えることは、①は宝篋印塔の形態を保っているが、②はそれを失って、むしろ強調されているのは彫刻の技であるということである。

五、基壇

三枚の切石を並べてある。正面側には横に長い一石を置き、その奥（背面側）は、先の一石の半分の長さの切石を横に二枚置いてある。だから正面からは一石に見え、他の三方からは二石が並んで居るように見える。

①の基壇２と、②の基壇を比べてみると、両者とも基礎の下に配置してあるところは共通している。築石壇を含め、基壇は石塔の位置をより高く誇示するために設けられるものである。江戸時代になると、塔の威厳の強調が激しくなって高さを競うようになる。江戸期の宝篋印塔の基壇を、鎌倉時代のそれに引き比べると、様式図の関東式に、二段に渡って「基礎」としてある内の地面に近い方の基礎がこれに当たる。

①の基壇２には文字は刻されていない。土台として置かれているからである。これに比べて②のそれには、正面中央に「寶篋塔」とあり、その左右にそれぞれ六行の文字列がある。この刻字は彫りが浅く読みにくいので、撮影してモニターで拡大しながらためつすがめつ見てみたのだが、向かって左側六行はことに読みにくかった。

先に紹介しておくと、ここに刻してある第一行の二文字と中央の三文字を除く六四文字は「一切如來心秘密全身舎利寶篋印陀羅尼經」から抜粋されたものである。この経は『大正新脩大藏經』第十九巻密教部二に三種類が収録されており、その中の№一〇二二Ｂからとられている。同書の七一三頁、中段一九行一二字目から二三行七文字目までになる。活字になおすと次のとおりである。なお、傍線を付けた文字は、「寶篋塔」では判読できずに『大藏經』から補った。

經曰／若有有情能於／此塔一香一華／禮拜供養八十／億劫生死重罪／一時消滅生免／　寶篋塔　／災殃死生佛家／若有應墮阿

鼻／地獄若於此塔／或一礼拝或一／右遶塞地獄門／開菩薩路

右側面に並ぶ二つの切石の、右側の石に年銘が次のようにある。

于維文政七甲申歳／仲春吉辰

「文政七甲申歳」は西暦一八二四年である。「于維」には『広報えびな』七三四号に「えとこれ」とルビが振ってある。「于時」と刻字した例はよく見るが、「于維」は珍しい書き方ではないだろうか。

左側面の二つの石の左の石に次のようにある。

相州高座郡／東光山／國分寺／拾ヶ村／講中

背面の二つの石の右の石には

當所／発願主／飯田弥兵衛母／世話人／飯田忠兵衛内／同／岩壁善六母／同／金子庄左衛門母／

とあり、左の石には

厚木横丁／い組中／小田原青木善左衛門／弟子／厚木住石工常吉／市ヶ谷田町貳丁目／石工長四郎

とある。

基壇に載る基礎の背面には、先に紹介したように江戸市谷田町の町内の名、及び「鳶中」「若者中」の刻字があので、この塔を建てた関係者に関することがらを、塔の背面の上下二段にまとめて書き付けているのである。

発願主と世話人については『広報えびな』七三四号に詳しく解説してある。ここでは江戸の市谷田町の町火消し六番組と石工の関係をたどりながら、この塔が建てられたいきさつを考えてみる。

なぜ、②の塔に江戸火消し六番組が関係しているかといえば、江戸町民の大山詣りが契機になっていると思われる。現国分寺は大山道青山通りに面している。奈良時代の国分寺の系譜をたどるという東光山国分寺は大山参詣者には広く知られた寺院だったのだろう。この寺を訪れた大山参詣者は多くあったはずだが、六番組が係わったのはなぜだろうか。想像をたくましくすれば、六番組とこの塔を繋いだ人物がいて、それは市谷田町貳丁目に住む石工長四郎だったといえないだろうか。長四郎は厚木に住む石工常吉とこの塔を制作した人物である。町火消し六番組の一員だったのかも知れない。そして発願主、飯田弥兵衛母と世話人の三人に造塔を進めたのではなかろうかと筆者は考える。

冒頭に紹介した茅ヶ崎市内の江戸期の四基の宝篋印塔は十八世紀前半に建てられている。一方、「寶篋塔」の造塔は文政七年（一八二四）であり、両者の間には約百年の時間差がある。先に見たように、萩園満福寺塔と現国分寺塔とには各所に違いがあった。その違いを生じさせたものは、宝篋印塔に対する信仰心の変化、及び宝篋印塔の意味の理解の変化だったと思う。内容の変化が形の変化としてあらわれているのである。

（二〇一九年十二月二十四日　記）

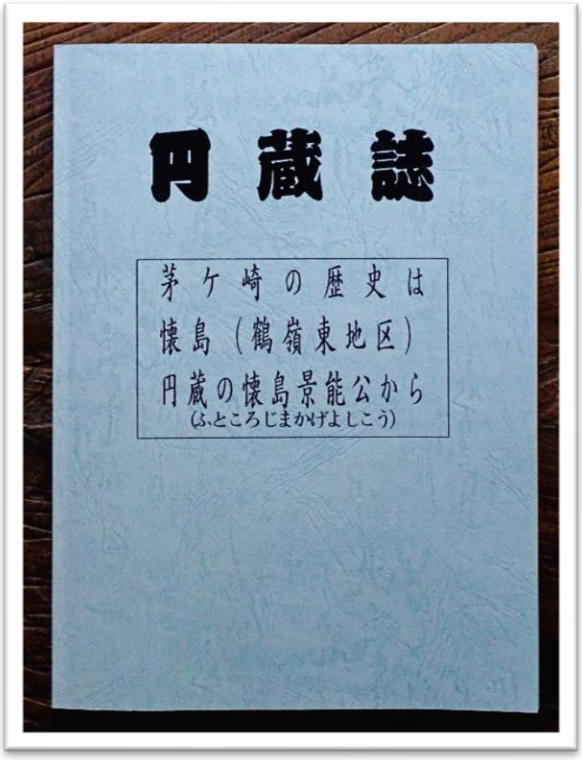
本の紹介

小川正恭

『円蔵誌』

―茅ヶ崎の歴史は懐島（鶴嶺東地区）円蔵の懐島景能公から―

発行者　小室正明、　発行日　令和元年十月一日、　Ａ４版
全２２６頁　私家版



まえがき（１頁）とあとがき（２２６頁）から、著者の円蔵地区に対する強い郷土愛が感じられた。また、それが著者の心にわき上がった経緯も読み取ることができた。歴史的な文献資料などを、著者は早くから集めてきたようだ。そのことが本書の執筆・刊行の源泉になっている。これらの関係資料が、地域の歴史や伝承（日々の暮らし）の大切さを著者に訴えかけたのである。そして、これらを後世に語り継ぎたいという煮えたぎる思いを抱かせたのである。

そのために著者は、本書が「円蔵地域を理解するための一助となり、円蔵地域発展の礎として」活用されるよう、円蔵にかかわる歴史、伝承を徹底的に抜粋して本書に収録した。さらに必要に応じて解説を付し、表に表し、地図に落とし、さらに写真やイラストを用い、分かりやすくと工夫し、史料集であり資料集でもある本書が作成された。

著者は「後書き」に、「平成三十年四月から執筆に取り掛かり」、「楽しくて夢中でやってしまった…。わずか一年余で」という感想を述べている。この溢れるほどの情熱の表れが本書なのである。読者は自ずと本書中を引き回されることになる。

本書の構成は実にユニークである。それを簡略に紹介するのは難しい。本書の主なテーマを、強引に章・節に変えてみると以下のようになるだろう。

まえがき
第１章　円蔵を知ろう　写真・資料展
第２章　円蔵関係年表
第３章　和名類聚抄～江戸末期・明治初年までの史料
第４章　明治以降～昭和二十年代の暮らし＝古老の伝承、生活の諸相・行事・信仰
第５章　自治会活動を通してみる円蔵＝昭和二十年代後半コミュニティとしての円蔵
第６章　茅ヶ崎の歴史（２０数頁が懐島景能の時代）
参考文献

あとがき

このような章題では味も素っ気もないが、例えば、第３章の一部に当たる９７～１１０頁（資料２７－１～資料３１）には「大山街道歴史物語」と「円蔵の伝承話」が取り上げられていて、地図、図表、写真、イラストが多く、大変に読みやすい。

加えて、９９頁（資料２７－３頁）に記された「茅ヶ崎の大街道の昔を知る人々に、お聞きした記憶をご紹介します。」の部分は史（資）料集である本書の中でオアシスのような役を果たしている。このような箇所があちこちに設定されているので、本書をパラパラとめくりながら、読み解きの入り口にすると良いだろう。河童徳利の語りなどに複数の解釈がある場合、無理に特定の一つだけを正しいものと決めつけていないことが分かる。そのような趣旨が本書では一貫して守られており、心地よく感じながら読む事ができた。

それにしても、神明大神の棟札と円蔵村の成り立ちを記す史料に挟んで、大山街道に関連する事柄を配置する編集方法は、まことに自由で独創的である。

錯綜する現実を反映した史料や資料や聞き書きを、著者は独特に結びつけて見せてくれている。読者は自分の関心に基づきながら、それらをつなぎ変えたり、補足したり、あるいは置き換えたりしながら再編する楽しみを持つことができるだろう。本書を一読してそのように感じた。

本書を紹介するに当たって、「史（資）料」という言葉で指す対象とは何なのだろうかとか、それを抜粋して書き留める作業はずいぶんと幅のあるものだなあと呟きながら、書評風な文章を書きはじめたのだが、それを止めて、細かな整合性などを求めずにこの紹介文を書いて良かったようだ。

茅ヶ崎郷土誌に貴重な一冊がまた加わったのである。

風　自由投稿欄

北マケドニアからのご来茅

～紙芝居は民俗学？！～

長谷川由美

二〇二〇東京オリンピックに向けて、茅ヶ崎市は、北マケドニア共和国とホストタウンになりました。これは、オリンピックを契機に相手国と交流を持とうという国のシステムです。

文化交流となれば、茅ヶ崎郷土会も加盟している茅ヶ崎市文化団体協議会の出番です。文化祭のコンサートに北マケドニア人で、東京在住のチェロ奏者をお招きし、工芸造形展に、民族衣装などを展示することになりました。さらに十月五日の文化祭の開会式には、臨時代理大使イヴァン・カランフィロフスキー氏をお迎え

できることになりました。

茶道の先生方がお呈茶でおもてなし。また開会式と同日開催の工芸造形展、紙芝居と朗読の会をご観覧の予定です。さて、どの演目を観ていただくか・・・。ひらめきました。「そうだ！紙芝居だ」と。予定されていた演目は三つ。①茅ヶ崎の民話「河童徳利」は中学生の女の子が上演、②「猿地蔵」は人形も使う、歌もあるアクティブな演出、③「ぼくのこまど」は和紙を染めて作った紙芝居。どれも、地域の民話や、日本の素材を使った作品で、「河童」や「お地蔵さん」という日本独特のキャラクターも登場します。これなら楽しんでいただけるはず。

というのも・・・私は大学卒業後、英国の学校に「日本語と日本文化を紹介する先生」として留学していました。その際、紙芝居や演劇が「文化を知る」ためのとても良い材料だと実感したのです。例えば私には、「五世紀頃の英国のアーサー王の絵を描いて」と言われてもさっぱりイメージが湧きません。ところが現地の子どもたちは何食わぬ顔で、絵を描き衣装を作り上げていくのです。逆に「おむすびころりん」の紙芝居を英国の子どもたちに見せると、みんな興味津々！「ライスボール（おにぎり）が、転がって逃げるの？」、「おじいさんの家の屋根は、何でできているの？」、「なんで頭巾を被っているの？」、「日本人はサンダル（草履）を履いているの？」などなど。紙芝居の世界は、彼らにとって、まさに異文化そのものだったのです。

イヴァン臨時代理大使は、興味深そうにご観覧くださいました。北マケドニアには、紙芝居は無いそうです。子ども向けの童話などはあり、近く大使館で日本向けの書籍を扱うとのこと。「では、その童話を来年はぜひ上演させてください。」、「いいね！」とお話

しました。その後、工芸造形展に立ち寄られ、展示されていた和風創作灯籠の中で、お好みとおっしゃられたものが作者から贈呈されました。

茅ヶ崎市民文化祭の出展品が、今は大使館で来訪者をお迎えしているそうです。

（茅ヶ崎市議会議員）

私のふるさと

― 東京都中野区野方町 ―

小川正恭

たまたまパソコンの近くにあった国語辞典（金田一京助他編『新明解国語辞典　第五版』　一九九八年　三省堂）の「ふるさと」という項目を見ると、

【故郷】その人が短からぬ歳月住んでいる（住んでいたことの有る）土地。〔狭義では、精神形成期に親・同胞と共に住んだ土地を指す〕

という説明で始まっています。

これを基準にすると、一九四二（昭和十七）年に生まれてから住み続け、少なくとも小学校（中野区立野方小学校）時代（昭和二十三年～二十九年）を過ごしたので、旧中野区野方町のあたりを「ふるさと」と呼ぶことにとくに問題はありません。後に、私は家族と共に、一九六三（昭和三十八）年七月に小金井市に引っ越しをしましたが、そこまでも加えると二十一年間も同一地域で暮らしていたことになります。これでこの地域を私の「ふるさ

と」と呼んでも良いはずです。ちなみに、現在は茅ヶ崎市富士見町に一九七九年十二月から住んでいます。茅ヶ崎市民として四十年も住まい続けて私の人生の半分ほどに当たる期間になっているので、同一地への居住を条件にしたら、茅ヶ崎市が第二のふるさとになるでしょう。

さて、子ども時代に戻ると、ふるさとといえる「地域」は、旧中野区野方町二丁目が中心になります。その周囲に小学生にとって徒歩で赴くことがある範囲が広がります。それはほぼ四角い形をしていて、鉄道の駅名でいうと、南にはＪＲ中央線の中野駅や高円寺駅とその界隈の商店街があり、北には西部新宿線の野方駅、沼袋駅、新井薬師前駅とその商店街とが連なっています。この範囲を学区として眺めると、西は環七で、南は早稲田通りを境とし、東側は新井薬師で、そして、北は妙正寺川で区切られていました。その区域の少し北寄の、旧野方町二丁目に当たります。上述の商店街では、高円寺に良く買い物に行った記憶があります。

横道にそれていきそうですので話を元に戻しましょう。まず、「ふるさと」いう言葉を聞くと、「うさぎ追いしかの山　小鮒釣りしかの川」のメロディと共に思い出されるのは、山・川・森・田んぼなどの田園風景のもとで長閑に展開される、伝承に溢れ、米作に頼る暮らしぶりなのです。これが私の小学生時代を過ごした中野区の北半分の辺りにあったとは思えません。その断片は少しはありましたが。

この中途半端な「ふるさと」感覚を強めてくれる一つが、学区域に張り巡らされた想い出網の強さです。細かなことは（個人的にはそこが面白いところですが）全て割愛して、要点だけを述べておきます。

小学校は六年間通じてクラスが固定していました。つまり、小学校で私の学年ではクラスの変更がありませんでした。この話をするとほとんどの人は、「ほんとか、珍しいね」と驚きます。そのクラス会は還暦に当たる二〇〇二年から毎年開催されるようになりました。その席で会う仲間とも、しばしばこのことが話題に上りました。でも、誰もその理由を聞かされた覚えはなく、担任の先生からも「なぜかは分かりません」との返事が戻ってきただけでした。因みに学童は六年間一緒でしたが、その間にだいたい二名の教員が担任になっていました。また、次第に東京に転入してくる人々がふえて、その子どもが転校生として増えてきました。一クラスの規模が四〇数人から五〇数人に、あるいは六〇人近くにもなりましたが、学年全体は四クラスのままでした。

この六年間クラス替えのないやり方の一つの効果が、私のふるさと観に一定の影響を及ぼしているのではないか、根拠のない推測ですが、そう思われるのです。五〇人ほどの同級生の結び付きはいろいろあって、狭い範囲に住む子どもが六年間も毎日一緒に学校生活を送ったのです。一緒に経験をし、それにさまざまな情報が絡み、噂話などの一種の伝承として、意識されないうちに、しっかりした形の関係が作られていたと想像されるのです。さらに、学校外での遊びを通して、あるいは親たちがもたらす情報を取り込んで、同級生のお互いの性格や、家庭の状況までもかなり詳しく知って、付き合いの密度が濃くなっていました。これらが私の「旧中野区野方町ふるさと」観をささえる大事な要因だと感じられるのです。（続く）

茅ヶ崎市湘南地区に
“おでかけワゴン”を走らせよう

羽切信夫

私が住んでいる茅ヶ崎市中島は、市の南西部に位置し、約三千人が生活しているが陸の孤島といわれている。

住民の足であるバスは、神奈川交通のバスが国道一号を走っているが、日中は一時間に二本である。茅ヶ崎市が運営しているコミュニティーバスは地区内を走っていない。買い物をする商店も地区内にはファミリーマートが二店あるのみで、医療機関もゼロである。従って、高齢者や障害者などの社会的弱者が通院したり買い物に出かけるには大変不便なのである。私たち高齢者団体「中島みどり会」は中島自治会・民生児童委員などの方々と神奈川交通バスの増便や茅ヶ崎市営のコミュニティーバスの地区内運行を訴えてきたが、今日までその要求は実現していない。

この様な状況の中、湘南地区で活動している「湘南地区まちぢから協議会」が「ＮＰＯサポートちがさき・まちづくりスポット茅ヶ崎」と共催で本年三月十日、コミュニティセンター湘南で「くらしの足を地域で支える　―湘南地区の交通を考える勉強会」を開催した。勉強会には湘南地区内の自治会長・民生委員・高齢者団体の役員など約五〇人が参加した。

主催者を代表して後藤湘南地区まちぢから協議会会長が、勉強会の趣旨について熱のこもった説明を行った。そのあと「ＮＰＯサポートちがさき・まちづくりスポット茅ヶ崎」の入井さんが「湘南地区の交通移動に関する調査報告」をスライドを使って詳細に行った。

後藤会長は質疑応答の中で、「菊名の『コミバス市民の会』の取組を参考にして、令和二年度中に中島地区で運行ができるように頑張りたい。市内の福祉団体から協力の申し出もある。湘南地区内の各団体のご協力をお願いしたい」と答弁した。

湘南地区に「おでかけワゴン」を走らせよう
おでかけワゴンにお手伝いいただけませんか

二〇一九年、暮れの迫った十二月中旬、湘南地区まちぢから協議会からのチランが地区の全家庭に配布された。その内容は、近くにお店や病院がない。重いものを持って帰るのが大変…。乗り合い交通プロジェクトは、地域の皆さんと一緒に、できる範囲でおでかけに利用できる車を走らせよう、というプロジェクトです。「運転が好きなのでぜひ協力してみたい」「車の運転はできないけど、何か地域のために協力したい」「どんなプロジェクトなのかもっと詳しく知りたい」など…、この事業にご興味がある方はお気軽にご連絡下さい

というものだった。具体的には、「運転員」「添乗員」「運行管理員・運営サポーター」の募集である。

仄聞によれば、この事業に神奈川県と茅ヶ崎市も重い腰を挙げて協力するようだ。

私は高齢者団体である中島みどり会会長として、地区内の心ある人達がたくさん応募し、二〇二〇年の春頃には茅ヶ崎市に初の民間団体による「おでかけワゴン」が湘南地区内を走ることを夢見ている。

（二〇一九年十二月十七日）

茅ヶ崎郷土会の活動報告

第二九五回　史跡・文化財めぐり

戸田の渡しを訪ねる―海老名市門沢橋・厚木市戸田―

山本俊雄

令和元年九月二十八日（土）　参加者一一名

今年度の史跡めぐり第三回は、海老名市門沢橋から厚木市戸田を巡りました。町田さん提案の相模川の渡し場を訪ねたい、との意見に皆さんが賛同した結果によるものです。

そこで先ず下見に行きました。下見は、九月五日の天気の良い日でした。平野さんご夫妻と、尾高さん、熊沢さん、小山さんの六人の大部隊となりました。門沢橋駅を降りて、村の名の言われとなった「門沢橋」を探しに、駅南方の永池川に向かっていて、正覚寺裏の辺りで家の修理をしていた工務店の人に聞いたところ、親切な人で、スマホを使って探したり、仲間に問い合わせてくれたりで、案内までしてくれて、その結果、永池川に架かる橋ではなく、その支流の原川に架かる短い橋を見つけました。これでは我々で探すのは無理なことだったと思いました。その人に、我々は茅ヶ崎から来た事、史跡巡りの下見でこれから正覚寺や浄久寺に行くと話しますと、案内すると言われて、一緒に行く事になり、正覚寺から浄久寺、渋谷神社まで違和感なく一緒に歩いてくれて、仕事は大丈夫かと思うくらい付き合ってくれました。その間「茅ヶ崎市のどこそこで工事をした」とか、渋谷神社の鐘楼を見ながら「去年は知り合いが浄見寺（大岡越前守一族の菩提寺）の鐘楼を建て替えた」と言っていました。「会社は駅前の東側にある」と話していたその人の背中に名札がぶら下がっていて、見ると斉藤さんでした。

本番当日は天気も良く、めぐり日和でしたが、茅ヶ崎駅の改札口前には人が溢れており、「今日の参加者は凄いなあ」と驚きました。しかしよく見ると旗が違います。鎌倉の某ガイド協会が旧相模川橋脚跡ほかを訪ねるとのことでした。参加予定者は百名余、私も以前によくお世話になっていたので挨拶をしますと、平野会長が本日のレジメの交換をしたらどうか、との事で交換してもらいました。我々は小人数の出発となり、香川駅から熊沢さん、町田さん、中村さん、杉山さんの四人が加わり、門沢橋駅では小山さんも先着しており、総勢一一名となりました。

門沢橋駅に着くと、先ず原川に架かる①**「門沢橋」**を見た後、②**浄久寺**に向かいました。下見のときに本堂内を拝観させていただくようお願いしていたので、会長が庫裡に挨拶に行っている間に、江戸時代の門沢橋村の**領主長谷川家代々**の供養塔である、**宝篋印塔群**を見学しました。「塔群」と言いますのは、大型のものを中心に一五基も建てられているからです。長谷川家は一族の平蔵が「鬼平犯科帳」のモデルとなっていることで有名です。

本堂に案内され、**本尊の市指定重文、木造阿弥陀如来坐像**を拝みました。像は平安時代後期の**定朝様の仏像**で丸く穏やかな面相、ゆったりとした体、浅く整えられた衣表現などの特徴がみられます。内陣の両側に祭ってある法然上人（向かって左側）、善導大師（右側）等を拝観していますと、奥様からお茶と御菓子の

ご接待を頂きました。皆、大喜びでした。また、「境内には筆子塚もある」と町田さんが案内してくれました。

続いてすぐ前の**③正覚寺**に行きます。境内を拝観するだけの積りでしたが、庫裡に挨拶に伺いますと、奥様が「本堂に上がって下さい」と言ってくださり、住職もおいでになり、突然の訪問にもかかわらず丁寧に説明して頂いたのでした。**市指定重文の本尊、木像十一面観音菩薩坐像**だけでなく、両脇侍の木造不動明王像と真っ赤な木造愛染明王像、木造弘法大師坐像、不動明王の掛け絵と、青く塗られた木造青面金剛像などを拝観しました。

お礼を言って次の渋谷神社に向かいます。この道は柏尾通り大山道なのですが、狭い上に車の通行が多く、注意しながら、道々町田さんが「ここは元宿屋の〇〇家だ」と、数か所を教えてくれました。**④渋谷神社**は江戸時代には**神寿稲荷（かんじゅいなり）**と呼ばれ、明治六年（一八七三）に門沢橋村の村社となり、渋谷神社と改称されました。社前には高札場があったと言われます。「本殿は市指定重文で小規模な建物ながら彫物装飾を効果的に用いた造りであり、十八世紀半ばの特徴をよく示している」と説明板に書かれています。それを見たいと思ったのですが、覆殿の内に安置されているとのことで、見られませんでした。

神社を出て西進しますと、**⑤戸田の渡し跡**の説明板が河原の手前にあります。「戸田の渡しは舟二艘を常備し、門沢橋はかつて旅籠、茶屋などがあり賑わいのある宿場であった。安藤広重もこの地を訪れ浮世絵を制作している。」とありました。この後、相模川の自然堤防に出て、対岸の厚木市戸田を眺めました。下見では河原に出て、草木や竹藪の間を、渡しの遺構がないかと数百メートルも下流方向まで探したのですが何もありませんでした。

本番では堤防上から皆で眺めるだけにして、早々に戸沢橋近くで昼食としました。

お店はランチの量も多く美味しかったのですが、ちょっとした事件（？）が起きました。全員で座敷に上がっていたのですが、お膳を運んできた小柄なアルバイトと思える女性が、テーブルの奥の人に渡そうとしたとき、手前に座っていた二人の背にお膳をひっくり返してしまったのです。手前の今井さんは背中一面に、右横の西さんはチョッキの脇から前にかけてごはんやみそ汁、魚フライをひっかぶってしまいました。その子もびっくりして手拭いやナプキンなどをいっぱいもってきて拭いてくれたのですが、それっきり引っ込んで代わりのお膳は別の女性が運んできました。多分ショックだったのでしょう。気の毒にと思いました。今井さんと西さんはさす

戸沢橋の上から相模川を見る　向こうが下流
この辺りに戸田の渡しがあったといわれるが、
その場所は不明

が年の功か泰然自若何も言われず、食事を終え、店を出ました。今井さんは予定通り、そこで別れ帰られました。

県道二三号（長後街道）に架かる⑥**戸沢橋の両端にある欄干の標柱**に「戸田の渡し」の説明がありました。橋を渡って戸田の⑦**福蔵院は**、本堂に隣接する墓地に、厚木の富豪だった小塩家の墓があり、その中の一つの墓塔は茅ヶ崎市柳島の藤間家から小塩寛蔵の嫁となった幾のものです。それを確認し、次の⑧**八幡神社**に向かいます。庚申塔や「地主神」塔や疱瘡神塔などの石仏を見学し、次の⑨**延命寺**を参拝します。下見の時には門前に「山門不幸」と書かれていました。その意味が分からず聞きますと、住職が亡くなられたとのことでした。本堂内をおまいりさせて頂きたいとお願いしてありましたが、この日は本堂で葬儀があるとのことでした。にもかかわらず、葬儀の準備が行われる中、厚木市指定有形文化財の木造菩薩立像二駆などを拝観させていただきました。両像は平安時代後期の定朝様の特徴をよく示しています。二駆は本尊両脇に安置される一組とみられ、三尊の脇侍であったと考えられていますが尊名は不詳とのことです。現在の本尊は千手観音菩薩坐像ですが、江戸時代の『新編相模国風土記稿』には「古は江ノ島上ノ宮護摩堂に安んぜしを、後ここに移せし由、蓮華座に記せり」とあります。

お寺を辞して再び土手に向かい⑩**「戸田の渡し」の記念碑**を訪ねて、広重の浮世絵を元にしたプレートを確認しました。ここで解散し、香川組の町田さん、中村さん、杉山さんと小山さんが相模線で帰るために元来た道を門沢橋に戻りました。残った六人はそんな元気もなく、戸田からバスで平塚駅に行き、駅ビル内で反省会を行いました。「キープができる一升瓶が半額」の宣伝につられて頼みましたが、登録した平野さんとスマホを持っている前田さんが揃わないと次回は飲めないとのことで、前田さんに「今後も必ず出席してください」とお願いしました。小川さんはいつもの春風駘蕩、西さんはみそ汁などをかぶったチョッキもすっかり乾いてご機嫌でしたが、思い出したように一言。「手拭いをいっぱい持ってきて拭いてくれたのは良かったが、特に謝りの言葉が無かったナア」と。熊沢さんは下見の時からバスでの帰着を発案されていたことから、早く帰着できたことにご機嫌のようでした。前田さんからは「不得手でもカメラは必ず用意して撮るように」とアドバイスがありました。「目が違えば下手でも良い写真が撮れる事がある。今はデジタルなので、何枚でも撮った方が良い」とのことでした。平塚での楽しい反省会でした。

第二九六回　史跡・文化財めぐり

相模国分寺跡と海老名氏の遺跡を訪ねる

―海老名市国分・上郷・河原口など―

山本俊雄

令和元年十一月十六日（土）　参加者一三名

今年度の史跡めぐり第四回は、海老名市です。相模武士団の有力氏族にて鎌倉御家人海老名氏の遺跡を訪ねようとの企画です。先月十月に事前勉強会を行ない海老名氏を学習しましたが、聞きなれない人物名が多く、分かりにくい内容となり申し訳ありませんでした。今回の巡りが、海老名氏をより理解しやすくなればと思ったのですが、人物を比定する遺跡が少なく難しかったのは同じでした。下見では、現国分寺、国分寺跡から温故館を経て、青山通大山道に戻り西に進み河原口交差点のすぐ西を斜め西北に、有鹿神社方向に進みますと、その手前一帯が海老名氏関連の史跡と伝わりますが、見られる史跡が少なく、時間もかからなさそうなので検討の上、本番では初めに国分尼寺まで行くことにしました。

当日は天気も良く、茅ヶ崎駅を九人で出発、香川駅から熊澤さん、町田さん、杉山さんの三人が参加、十二人での巡りとなりました。海老名駅に着くとＪＲから小田急の駅まで、屋根付きの動く歩道のある通路を中央公園に向かいます。皆さん駅周辺の余りの変わりように感心しきりでした。中央公園では、国分寺跡にあった**①七重の塔の二〇ｍの模型**（本物は六五ｍだった由）の前で、本日のコース説明、平野会長の挨拶があり、いよいよ四時間、一〇キロコースへの出発です。

先ず、**③東光山医王院国分寺（現国分寺）**、その手前にある**②海老名の大ケヤキ**を見ると、説明板には「相模湾が深く切れ込み入江となった頃に、漁師が船を繋ぐために杭を打ったのが根付き成長したとの伝承がある」とあります。縄文海進なら六千年前、それでもここまで海が来たのか（？）、一体いつの時代の事かと話していました。

現国分寺の**重文の銅鐘は**、海老名氏一族の**国分季頼**が承応五年（一二九二）に国分尼寺に寄進したものです。作者は、銘文から円覚寺や称名寺の梵鐘を手掛けた鋳物師物部国光です。境内には、恋しい漁師のために国分寺を焼いた国分尼寺の尼さんを供養する**「尼の泣き水」**の供養碑もあります。平野さんから「茅ヶ崎の七堂伽藍にも漁師のために伽藍を焼いた尼さんの話がある、こういう話はあちこちにあるのではないか」と説明がありました。続いて**④温故館**に向かいます。ここで平野さんから**「石橋供養塔と逆川記念碑**を写真に撮りたいので行ってくる。約二〇分かかるので先に行って欲しい」とのことでしたが、温故館に着くと直ぐ後ろに平野さんがいました。「速いなあ、韋駄天の変わり身か」と思ったのですが、どうも道に迷って引き返してきたようでした。

館内で各自見学をしていたところ、入口付近で町田さんらに説明をしてくれていたボランティア解説員の三沢さんに尾高さんが、「逆川跡と船着場跡に行く道順を教えて欲しい」と尋ねたところ案内してくれることになりました。目の前の**⑤相模国分寺跡**（国指定史跡）の説明もそこそこに最短距離を進みました。自分

は行く道も大体分かっている積りでしたが、五、六年前の記憶で、案内無しでは矢張り迷ったかもしれません。**⑥逆川跡の遺構や船着場跡**までを丁寧に説明頂き三沢さんに感謝です。名前を伺ったところ、歌手の三沢あけみは妹だと言っていました。本当かどうかは解りません。

⑦相模国分尼寺跡（国指定史跡）ではお堂と庚申塔等の石像があり、皆で写真に収めました。予定よりも時間が過ぎていたので、戻りを同じ道でなく、近道をしようとまた近くの人に聞いたところ袋小路に入ってしまい、「聞いた通りに店の前を右折したのに」と西さんが頻りにぼやきますと、前田さん、今井さんも「そうだ、そうだ」と言っていました。次の小路を右折したところ小田急線を人道橋で跨ぎ、駅方面も越え、文化会館の先で青山通大山道に出ることができて大幅な近道となり、おかげで一二時半頃には河原口交差点の食堂に入ることができました。昔風の、一品ずつを選べる店でゆっくり英気を養いました。午後はいよいよ海老名氏の遺跡まわりです。

⑧海老名氏記念碑（上郷遺跡）は、河原口交差点のすぐ西を北西に進むと**横須賀水道みち**にぶつかる、その左角に記念碑があり、それが海老名氏記念碑でした。その道を挟んだ北側が上郷遺跡といわれます。「**上郷遺跡**は畑の耕作中に偶然発見された。五輪塔や板碑、集石遺構が確認された。板碑は室町時代の年号銘が大半を占めており、宝樹寺跡の存在から、この地を治めた海老名氏に関係する墓地ではないかと考えられている。」（『海老名文化財散歩』）。

水道みちを西に行き、突き当りを左折するとすぐ右が**⑨有鹿神社（あるかじんじゃ）**です。近道で横から入ろうとすると、小島さん、尾高さんに「正面から入らないと駄目だ」と言われ皆さん少し遠回りをしました。平安時代中期の「延喜式」神名帳に記載されている相模十三社の一つです。永和三年（一三七七）の作成とされる「有鹿明神縁起」には、「神亀三年（七二六）に存在し、天平宝字元年（七五七）に海老名郷司藤原広政が中心となって再建、鎌倉幕府滅亡時に兵火にかかり本殿以外の建物が失われた」と記されています。

「今から約四百年前、総持院のお坊さんが『良い水源を教えるから、明日の朝、境内から飛び立つ白鳥（しらとり）の後を追え』との霊夢を得て、翌朝に鳥を追うと、磯部村勝坂の集落で姿を消した。そこの洞窟に清水がこんこんと湧き出ていたので、ここを有鹿谷（あるかたに）と名付け、有鹿郷五か村の水源とした。それからは毎年四月八日の祭礼には、有鹿神社の御輿がこの有鹿谷まで行き、六月十四日まで、ご神体を洞窟に置いておくしきたりとなった。このしきたりは『有鹿様の水もらい』と言われた（『こどもえびなむかしばなし第二集』）」とのことです。続い

て南に進み、**総寺院**の先を右に相模川の方に行くと右側に、民家の間の小路の奥に**⑩海老名氏霊堂**があります。海老名氏は勉強会でも行いましたので詳細は省きます。ここで大きな石がお堂の右側にあったので、お参りしてから皆で座り少し休憩しました。長嶺さんが配ってくれた梅酒に使った梅がおいしかったです。「酒の弱い人は駄目だからね」と言われましたが誰も手を引きませんでした。

次は最後の**⑪厚木の渡し場跡**です。**青山通大山道**（矢倉沢往還）の渡し場です。渡辺崋山もこの道を通り『游相日記』に厚木の渡しのことを記しています。「対岸の厚木に厚木の渡し場の看板がある」と聞き、対岸の河川敷への下り道を遙かに眺めましたが見えませんでした。ただ、温故館の三沢さんの話では、渡し場はもう少し上流の小鮎川、中津川の少し上の方との事でした。以上で今回の巡りを終え、ＪＲ厚木駅に向かいました。

平塚に飲み物をキープしている店があるので、反省会をどこでするかに悩みましたが、結局茅ヶ崎駅に戻りヨーカドーの上階に新店舗があるとのことから、そこで楽しい反省会となりました。皆さんが順に昔のことを話され、貴重な楽しい時間を過ごしました。

第47回 茅ヶ崎市郷土芸能大会

郷土芸能大会の開催は十一月最後の日曜日とほぼ決まっている。今年は二十四日（日）であった。会場も市民文化会館の小ホールである。午後一時開演して四時ころ終演した。出演した一二団体が一四の演目を演じた。近年はこのスタイルが定着し、もう四七回目の開催だった。

約半世紀前、茅ヶ崎市も都市化が進み、人々の生活・生業や土地景観が大きく変化し、それにつれて自然や伝統的な文化が失われるという事態に直面していた。一方、それらを保護しようという運動が本市をはじめ県内の各地で行われていた。このような中で、廃れ行くものの一つとして郷土芸能が取り上げられ、保護、保存のために行政が係わる上演会が各地で行われていたのである。

茅ヶ崎でも旗揚げしようということになり、市教育委員会に協力したのが茅ヶ崎郷土会であった。昭和四十七（一九七二）年十一月二十九日に第一回目が行われた。『「郷土ちがさき」百号の歩み』（茅ヶ崎郷土会刊）の二二頁に、岡崎孝夫さんの筆で、「一回目は郷土会との共催、二回から四回までは郷土会に委託、同五十一年の五回目から郷土芸能保存協会への委託で行われた。」と書いてある。また『資料館だより』一二号に「郷土芸能大会　昭和

四十九年九月二十二日（日）一〇時～一六時、福祉会館三階ホール、出演団体一三団体、祭囃子の参加がふえたことが特徴だった」と三回目の様子が簡単に記されている。

当時の郷土会会長は塩川健寿さんだった。塩川さんは会の運営に熱心で、かつ付き合いも広く、市役所旧庁舎の市長応接室にあった、文化人の張交の屏風を作って寄贈したり、市内各地の郷土芸能団体を説いて、大会実施を進めたりされた。塩川さんの熱意によって実現したといっても良いのである。

福祉会館は今はない。個々の保存団体の構成員も入れ替わっている。しかし今年の芸能大会は例年どおりに盛り上がり、小ホールは満員だった。半世紀前の関係者の思いは、今も熱く引き継がれているのである。

（編集子）

【これからの行事予定】

○郷土歴史民俗勉強会

1月21日（火）　午前10時から　うみかぜテラス１F―１

石上巡査と中島　（丸ごとの会　加藤幹雄さん）

2月18日（火）と3月17日（火）は午前10時からうみかぜテラスで予定していますが、テーマなど未定です。

○第二九七回史跡文化財巡り

1月25日（土）

茅ヶ崎市柳島～南湖を訪ねて

（柳島善福寺・柳島八幡宮・旧藤間家住宅・南湖院第一病舎・南湖下町住吉神社・南湖仲町八雲神社）

集合　午前8時50分、茅ヶ崎駅南口1番バス乗り場、あるいは9時20分柳島善福寺。12時ころ八雲神社で解散

○23ヶ村調査会

1月7日・21日　2月4日・18日　3月3日・17日いずれも午後1時30分からうみかぜテラスで実施する予定です。

「郷土ちがさき」146号　正誤表

25頁　上段　後ろから4行　酒井→（正）坂井

27頁　下段　編集後記　「今年の夏はなんと暑かったことか。…だいたい奥方は寒がりで」のあと「表方は暑がりだが世の中には逆もある。地球上に、安心して暮らせる場所がなくなりつつあるらしい。せめて家の中は安穏に保ちたい。世の表方諸氏に告げる。戦う前から勝ち負けは着いているのだ。言われるままにリモコンを渡そう。無駄な抵抗はやめよう。

会のHPは「茅ヶ崎郷土会」を検索することで見ることができます。URLは http://chikyodokai.wp.xdomain.jp/ です。ご意見ご感想を待っております。どうぞ平野（090―8173―8845）まで。」が印刷版では欠如していました。ホームページ掲載版は訂正されています。

【編集後記】

また一つ歳を重ねました。生きとし生けるものの宿命です。「私はイヤだ」と言っても逃れることはできません。この一月一日号も会員のお力添えによって編集することができました。会員の中に、希に「原稿書くのはイヤだ」という人がいますが、そんな人も宿命と思って書いてください。いくつか書いているとその内にイヤではなくなります。人生とはそんなものです。

HP版は「茅ヶ崎郷土会」と検索することで見ることができます。URLは http://chikyodokai.wp.xdomain.jp/ です。ご意見ご感想を待っております。どうぞ平野（090―8173―8845）まで。